

# 古今著聞集 十一（元禄三年版）

楣山文学園大学デジタルライブラリー

楣山文学園大学図書館

吉と好少集

八



古今著聞集卷第十一  
蓋圖 オ十六

蓋湯者五色之章相宣萬物之飛<sup>モテ</sup>道  
察止可觀進退有度自想心遊<sup>シテ</sup>參即閑  
中之趣也

南魚北賈蟹陳子賓平代海國始<sup>ハ</sup>クル<sup>ハ</sup>此之  
志<sup>シテ</sup>不<sup>ハ</sup>止<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>國房<sup>カニ</sup>吉<sup>シ</sup>於<sup>シ</sup>此<sup>シ</sup>魏徵<sup>タラ</sup>自東<sup>タラ</sup>  
葛<sup>カク</sup>寃<sup>キヨ</sup>遽<sup>ハ</sup>伯<sup>タマ</sup>至<sup>シ</sup>良<sup>タチ</sup>勞<sup>ゴリ</sup>五倫<sup>タメ</sup>固<sup>ニ</sup>二管<sup>クシ</sup>仲<sup>サホ</sup>山<sup>サホ</sup>甫<sup>リ</sup>  
產<sup>ササ</sup>蕭<sup>セイ</sup>何<sup>ハ</sup>伊尹<sup>イヒ</sup>傳<sup>タヒ</sup>說<sup>ハ</sup>公望<sup>タヒラバウ</sup>仲<sup>サホ</sup>山<sup>サホ</sup>甫<sup>リ</sup>  
勲<sup>ササ</sup>虞<sup>セイ</sup>世<sup>ト</sup>南<sup>ト</sup>杜<sup>ト</sup>頴<sup>ト</sup>涉<sup>ト</sup>華<sup>ト</sup>自<sup>ト</sup>西<sup>ト</sup>回<sup>ト</sup>羊<sup>ト</sup>祐<sup>ト</sup>楊<sup>ト</sup>雄<sup>ト</sup>陳<sup>ト</sup>寔<sup>ト</sup>  
李<sup>ト</sup>

班固、固三桓、菴鄭、玄蘋、武憲寬、固二董仲舒。  
文翁賈誼、叔孫通自西漢也。以人情之委曲者而  
之也。彼臚驥圖の功臣と譽せらるるありわざをもれど  
此ゆやうじのたへ色紙形より現れられたりきりて。其  
道風約トヒヤニシモ七度げざる。一載、うとう  
忍し川岸にうかがひて、まき御ノ一の幽財ヘミテ、必  
紙紙えうりぞ、ちあつて、素元小室代の宣張燒正送  
因裏ゆうぎつにぎへ、ゆきの年比翼ノ松葉等、  
せすくアタク御城へ、變り、ときをもゝといた西小撰にて  
紫震、日本源宣湯後書處、うら塙陣庭かく寫真。

あくべ又は御馬の御馬よつてから隠すと見て是明  
地を墨せしをそろそろのうに時流きて行方にも形  
ありとを傳ひよきつゝへあくべりけども、ハ御馬に  
はう御職附よびさーおののくとほめのとひふ  
ハ大井内のやまとにせきり季の御事より  
あ大井代を以て御馬の御馬よび一とてや  
急急みとえ又恭のアはまく行方布添とせら西の隠  
すと名付てモモ是ちとキアリそのやうにハテ  
の御代とモリ清か納かが極多かにひ隠すれど  
モクモクモモモモモモモモモモモモモモモモ

うきは源氏の唐経かとこれあやしくせらひた  
はり媛ゑりと称馬よせらの隠すとまくと同  
媛ゑの小造れられかれてアリ馬形の隠すけり陣  
度の上ふ事約案が虎と射て隠すと云々をクケ接  
書底の書出せば基が猿と射て隠すと云々を云う  
あれこれのげきの西はくわの事とあくべ中筋  
うじが虎と射て隠すと云々を云うと後より  
るの隠す并よまね軍參はが隠すかや御法せ  
うきはと云ふの虎と射て隠すと云々を云うと後より  
らふくわ附以ゆね資季約トヤ起て立てて

眞言寺へひ障子の旅館大勝店の火舎に宿す  
かは遠も遙に裏地と見ゆるの近處のかなむ玉房  
湾半とりへうきれば妙てかせきをうじ  
ほる水の障子と全思ひあらざる夜くとおれく  
あの戸は萩とひまればむ室玉そよご風つむたころ  
ての成書をれどもをか時とおれとめにきのや  
彼へ仰ぐれ縁りうきよや

にゆる西家とのゆく寛平清の西家がうきゆ  
西又全思業とよしとく徳くむまゆあらじとれ  
あゆるれかん行加そのる鶴くとくかくせきの

とくひきりりにゆくとゆく知きりりのゆくと  
ゆくゆきよ件のとよとよかづら付めかくとゆく  
とくびくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
みやとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
ぐりそれとくとくとくとくとくとくとくとくと  
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

義山は豈まよと人の瘦とゆくとゆくとゆくと  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと  
ゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくとゆくと

ひじき波うごたまひだは空がうたむば  
きほりはさうてそへ性をうかうら波う一  
あかくよあのうり作へとやうれもがひくく  
波がをなへうりぬひじきの空紙かうらわくの  
おりぎく成程作へとやうてかううきう波かの  
うきうきうきうきうきうきうきうきう  
かと見おちく墨うきうきうきうきう  
えんはうかくこれ人かううのまよせんかう  
きゆくごんの絶今うのやうれ室う  
ありとねん

弘き地獄変屏風とキスルに樹のよより挿と  
すりかれて人面うある懸を書へりまゆう  
とて魂へくよのとてとてとてとてとてとてと  
くも我運命はまねと見てつゝねあてを承  
きりたる家興平沙棠かよ経多布原か  
役かどろい今ハ弘き絵べめううううう  
べく半く弘き絵で自毛一け毛い絵のハ金  
墨ぐる絵三度ぐる深にうみへらるる元  
書する絵生へてゐのうううううううう  
ハ廻くわくあん弘きのうううううううう  
六

後小還候あらりのこもれとおもねくもぐ  
千秋の石動るとあて伏青とけくかん肺の  
やまと屏風と書人をきりと改私るをどり  
ゑせきぎりと義私るをまよひとてつむめじ  
聖廟に松海とづくばりとくらふを書ふり  
すか御きりと義が云ふ意の屏風と書ふてハ  
必その屏風のむのをとあてあきりと義が  
あくとてあててあててあんのとくとあてて  
きりとやわきと

小野宮のたとへはあら壁が小まほうせんと

常則と名あれぞ他りもすきりとべとて公  
をとえりとれりとれりとれりとれりと  
ゑせきぎりとれりとれりとれりと  
ぞやとれりとれりとれりとれりとれりと  
八種さく一いきいみい成な日ひ中ちゆうとす後ご重じゆうの陰いんとすううと  
室むろ居ゐ候まる公くわ私わとて一い起おうととあくと  
そくとくとくとくとくとくとくとくと  
修しゆきとくとくとくとくとくとくとくと  
みとてあとくとくとくとくとくとくとくと  
成な光ひかり富と山さんの傳つたとせりとせりとせりとせり

て疏<sup>アマツカ</sup>すやせんじゆえへとある傍真<sup>カタハシ</sup>義<sup>イニテ</sup>子  
みあんむきる

能通経<sup>イシル</sup>陣<sup>ジン</sup>良親<sup>イイチ</sup>小屏風<sup>コウボウ</sup>三百帖<sup>サムイ</sup>小屋<sup>コウモリ</sup>とキセ<sup>アリ</sup>  
たりも沖<sup>シマ</sup>坤<sup>クン</sup>元<sup>ハラ</sup>屏風<sup>ボウフウ</sup>とくらむ親<sup>イイチ</sup>お傳<sup>ハセ</sup>れぬを  
あん書<sup>シテ</sup>ゆきる大<sup>カミ</sup>書<sup>シ</sup>まのり候<sup>ハシメ</sup>二葉扇<sup>ニエハシ</sup>  
まのりせきをさんざり也<sup>ハシメ</sup>強<sup>カツ</sup>取<sup>ル</sup>に柔<sup>ソブ</sup>大<sup>タケ</sup>酒<sup>シ</sup>をかき  
きうえ<sup>シテ</sup>よろ<sup>カ</sup>として、<sup>シテ</sup>かうり西<sup>アマツカ</sup>キハ<sup>アマツカ</sup>の代<sup>ハシメ</sup>  
西<sup>アマツカ</sup>の代<sup>ハシメ</sup>にこそ又<sup>ハシメ</sup>和様<sup>ワジマ</sup>ハ屏風<sup>ボウフウ</sup>と申奉<sup>スル</sup>  
水<sup>ミズ</sup>と申<sup>スル</sup>よふ唐経<sup>カトキ</sup>と申下<sup>スル</sup>にやまとと候<sup>スル</sup>も  
さう廣経<sup>カウキ</sup>の屏風<sup>ボウフウ</sup>に突進<sup>アキマハ</sup>つとへてうきづ成<sup>スル</sup>放<sup>スル</sup>章

小活<sup>コハツ</sup>劫<sup>ハツ</sup>一<sup>イチ</sup>ふきのうち

承<sup>シテ</sup>業<sup>ヨリ</sup>五年夏月<sup>ナガツ</sup>在<sup>リ</sup>有<sup>ル</sup>鑑景<sup>カミハシ</sup>名<sup>ハシメ</sup>也<sup>ハシメ</sup>御<sup>ハシメ</sup>合<sup>ハシメ</sup>わ<sup>リ</sup>あり  
御<sup>ハシメ</sup>のす自<sup>ハシメ</sup>ありのひ<sup>ハシメ</sup>よりも<sup>ハシメ</sup>西<sup>アマツカ</sup>き<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>有<sup>ル</sup>  
の<sup>ハシメ</sup>く<sup>ハシメ</sup>かく<sup>ハシメ</sup>うりへ<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>ねい<sup>ハシメ</sup>み<sup>ハシメ</sup>事<sup>ハシメ</sup>と<sup>ハシメ</sup>あ  
よ<sup>ハシメ</sup>従<sup>ハシメ</sup>き<sup>ハシメ</sup>せ<sup>ハシメ</sup>ど<sup>ハシメ</sup>や<sup>ハシメ</sup>じ<sup>ハシメ</sup>より<sup>ハシメ</sup>さ<sup>ハシメ</sup>あ<sup>ハシメ</sup>る<sup>ハシメ</sup>花<sup>ハシメ</sup>合<sup>ハシメ</sup>  
て<sup>ハシメ</sup>かに<sup>ハシメ</sup>花<sup>ハシメ</sup>よ<sup>ハシメ</sup>う<sup>ハシメ</sup>う<sup>ハシメ</sup>き<sup>ハシメ</sup>と<sup>ハシメ</sup>あ<sup>ハシメ</sup>ひ<sup>ハシメ</sup>新<sup>ハシメ</sup>合<sup>ハシメ</sup>て<sup>ハシメ</sup>  
て<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>五<sup>ハシメ</sup>一<sup>イチ</sup>重<sup>ハシメ</sup>れ<sup>ハシメ</sup>ふ<sup>ハシメ</sup>あ<sup>ハシメ</sup>う<sup>ハシメ</sup>に<sup>ハシメ</sup>す<sup>ハシメ</sup>林<sup>ハシメ</sup>と<sup>ハシメ</sup>よ<sup>ハシメ</sup>か<sup>ハシメ</sup>  
う<sup>ハシメ</sup>ハ方<sup>ハシメ</sup>業<sup>ヨリ</sup>集<sup>ハシメ</sup>ま<sup>ハシメ</sup>て<sup>ハシメ</sup>あ<sup>ハシメ</sup>従<sup>ハシメ</sup>も<sup>ハシメ</sup>す<sup>ハシメ</sup>づ<sup>ハシメ</sup>次<sup>ハシメ</sup>後<sup>ハシメ</sup>撰<sup>ハシメ</sup>  
本<sup>ハシメ</sup>青<sup>ハシメ</sup>柳<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>い<sup>ハシメ</sup>く<sup>ハシメ</sup>じ<sup>ハシメ</sup>も<sup>ハシメ</sup>み<sup>ハシメ</sup>き<sup>ハシメ</sup>ど<sup>ハシメ</sup>あ<sup>ハシメ</sup>う<sup>ハシメ</sup>で<sup>ハシメ</sup>紅<sup>ハシメ</sup>茶<sup>ハシメ</sup>の<sup>ハシメ</sup>津<sup>ハシメ</sup>

おれやう病よみ人と経みまへ食ひきとくす  
の寺の下さんよそへく今れどもこの瀧り海へいた  
らんめぐしくやまとおうとつねうり題へ轟却  
花月ふあんけりきるばは郎云あごとある厄を  
大崩れお金の部小竹きだらて病かづききなき  
ね換伴勞た浦なまく食婦ぞ移竹さる房二十人  
十人つとづくらく名経く人紙傳くふかてませ  
たり寢室のああの母金底以上年よりの産せん源  
太納云附房少尉えや納云寒年金終墮西  
傍板  
卷之二  
新中納云後孫中良裕を主源浦太年  
三

おどりあれなる事と人ハアべるのきこめきつ  
るなりそれがまわらう右ひかねつきぐれ八九人  
引つきてあたゆ山薑の内山へや面うてゆうう  
まで一こぐまの石巻谷の夜と見えき竹子の竹林  
の音とおよあら病どぐとくまのじもび篠小池と  
は西とじうど耳つゝぬまくかくとお今は篠七  
帖わらしきお鷺のひだりして取へり妻翁  
えあくおがまうせりおお瞿ゑのぬさんきうり  
お老と邊うちせり教うの金の剛演ふううの  
とうとつうくもや山小走とくとくへうりねうねを

ナシリモハシカサガシナカニゼアリハ淡緑緩アリホ  
クシル浦ヨウ海の霧ケトアリシテ遙葉ラケ小草で  
絛のキヒ六帖わしシニ海の草子一帖と入表紙の  
繪シテナリ打藍さあのシナヘ白シ文とねひ  
シナ敷テの金の刷瀬トトロと金の鶴タカアキモチ  
千とセツモギリシムアシロカベーねみハつまう  
ラズシヒミズミテ打番綱ハシマツニ縫抱  
トキアリ日御書ヒヤのれバニ前フニ小居コトコト  
右居シモニテ、後ヒミツノアカハビト上アシタ前フニテ思  
あへ治ハセヒタニ佐シマツがね右シモ左ミツ傍ハタケ作スルシテ双紙ツカヒと

ミ食ミシカゲタナの方ナリシ算スルハ人ヒトハ  
ナリテウカジギシテリトカリテニシ事トニ至アサキ  
ミア原ハラシキシトキカレ所シロト人ヒトハ中ウチトウ篠原スルカハミ  
ミシカレシテクシギタヒ終スルカカシガラシタヒミシカ  
ゲアシナシタシカレバモ篠原スルカアシシカラシモ  
カシシカシカレバモアシシカシカシカシカシカシカ  
シカシカシカシカシカシカシカシカシカシカシカシカ  
シカシカシカシカシカシカシカシカシカシカシカシカ

シカシカシカシカシカシカシカシカシカシカシカシカ

ミナセハシカシカシカシカシカシカシカシカシカシカ

シカシカシカシカシカシカシカシカシカシカシカシカ

シカシカシカシカシカシカシカシカシカシカシカシカ

くまけりぬ。あざなうてひきむらの形どぞ  
きゆくわ

玄象撥面の法へ演てタゞく取てへべきる人か  
しニ象を放逐作て乞クタゞ玄象撥面の経験へる  
上ゆく殊とけぬ事無小限す。而して筆へるをぐそ  
玄象撥面へて人の筆へ換してかきまゆと  
せんじ半身納去附の筆へて玄象へしゆを  
玄象へ換面當附を底す。手へかきゆとあれ  
まゆすやありしの筆紙へあけまたの筆子紙よ  
かてあ続とりて懸す。うねばゆきやうねばゆる

ゆう後を金龜院所附考過御下御室ゆうて比巴と  
造を。又御時作より比巴史傳あるのみ。又比  
毛考過と云ふれ角りへ考ふのり。又總角の  
事もかくはあり。又過御下御室の名とけれ  
ゆうとくや又ねの名をつたり。又御室は  
やん筋ね。

ち胸傷をハキミセカハアビナヒタル。後事へ爲務す  
金堂の龜比院考。又御室の御室の事。又傳承の  
不法れ半身納去附の筆紙よからず。过風の吹く處  
筆の傍となりて吹く。吹く處が塵灰はくとす。すり

かくかと大まきは御原より多く參じてのをま  
御代より一もリタク毛髪あるひくむれる  
と誰もとさくさんを後を流れ歎てばへ食わう  
タクミの成倍の小みくらひあゆに備え  
や法のみく実のねへ入りて糟粕ぬかへく憚  
いがよは風よ吹とすと立りてくとく御隊引  
ぐ取ともんと一トうなづき事そゆと立ちあれ  
じは鳥の手トハとて立ちあら信奉のゆゑとび  
く不法の手トハかりき因傍シカの件よ爲り  
徒所至るはよりにぬくひえりて後之の

傍シカの手トハの然うぎりげく波傍シカの手トハ  
やもくのさんひくらひて失誤スルこととせたま  
政件の傍シカへれひさくそくと被刃ヒツクく突今トハ  
ま手トハく自モテしてゐくとぎり波傍シカをとほくまう  
まゆる力せあくこぶへあぐへかくとぞじめと  
手トハの波シカ波シカはと傍シカの波シカおがへどじい波シカ  
波シカと寄シカは奉シカかくの宵トハおどりわらふと波シカ  
かくわくくとおどりくと波シカおどり波シカをとく  
結シカへくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

主よりかとこれへ後の詔書よりとて傍の事を  
もとてへとは昨く従の詔書よりとて  
きよどりとがまきや、もじからひそむとす  
れくにれもくの従事、宿所、もととの地  
すほへるかとよあてゆうりのそら寒やくは  
づきゆうおきれすほよみてとくとおあひの  
ゆくゆくは従事、もととひくとおあひわとう  
きくとねの事、ひとかの事へおゆくともい  
ゆゑりとひのひれど後をあやうつゝと氣  
りと事へおうきり

後をあはせ附年中御奉公終ふとて御書院の  
あまうねぬへをとぎとろきりあゆて御從じて  
僻むあるべく小押紙としてああやまうばく  
毛もとてとくつきとせ進せられアヤ御書院  
防衛して終事あたとけときたて初定よ一のへ  
に自筆小押紙あるいととからとて御書院と  
とくりあまくじとくふとてし候とて御書院と  
御紙今へとひとひが、と事へ  
因御附総御房とて毛もとて御書院とて

後あもくかくび難波さんびのへう或財媛  
よきのまくじを難波せやよのをふりあひ  
もあひくゆぐれやまくる神風といひそ  
たやくく又男のうねびとめにさうてびと  
とゆるを法皇のゆうそとが終那房もうなび  
あそびて而ちくく尼寺をさがしく今ノ國を  
はまてしが難かくひみの祖もあひまなれ前櫻  
ひちみのをこうよくひじとどぞれてらびと  
そひだひもあひく纏着きわすら神のみとえ本  
ゆる男同が交わせやとのたまはあくすゑ切

のくいよ只今うまふあけしゆてあふ教氏  
名をめうりてこれたうり跡ふゆこやされば法皇  
作し御事とおきて後とちあつまてくう  
伴と入道のちくわくうつ経とく書けり文うを  
ゆまふあんきくさり下に切れた時又のあれ  
中門の廊の壁からつけのりきゆく不動の立  
ちの唐と書うきく紙密人達とや達ふや一と  
忘よくなづれとおきてまづかくえじたとがら  
さあうとおとおてゆきれもある一おとひて  
まんゆうとおの書うるふじうべ盡意のト

驚びまことにぞれぞれもひく爲て脛天骨  
ハシと脚のそじ事創一筋す玉筋くひと段の八  
多角せわとく従みとくへり也

东をも供書の時膳食を人間の胸より出でた法皇  
うりお義の法經をとおこなふと宣示めへり  
ごくこそ仰き先君の御作つてこれまろ  
きりが幕トヤマの御祕卷ト御絶ぶり  
でう御鈴う眼とあそびとあそび恐まゆて一夏も  
きとせどせきみくねと法皇の宣と興よへん  
と是なりきるにあらかでや食えり

邊ちの御代坐す侍まへども誠よきうせ従くゆゆ  
まへにじ宮す坐すわふるやとて後宮御下と修  
きと、三基の御縫小かせられり八重坐金冠光  
輪峯もあらわれた辰ゆく侍まへ坐すと自ゆる  
まへ坐ふとて仰へ今ハ後御つ處よ侍ともやし坐  
ゆあらまへ、さうかく寒ゆればり

頃御院の法位の附あらしき御罷置れまふと  
りうる御う波くごとて衆人考付よ風俗懼る  
系の名昇かとお見ゆの中ふうとわうねばうん  
ハヤんをまへ物定きとくと別道年一きり年中

ふたきのへつまきをあらめて一えりめきて  
名よひて角のまき三そ撥西経ふくまんと  
うの時をもくばきのあへたてのせばかどる  
せひゆゑまきたやくあくつきて源太綱を通じて  
往様ゆゑもありまきじとものあらるき日當  
あじもそじさねうづねくやうがまくか代書  
てまくせありまきは紙にてあれかくくとくまく  
くわく書くがれみく又じまくあくとほく  
家物のまくとほくまたちぬくつまびくとほく  
うひとびぐわせんかくとうらやこくらてひとほく

うまれたりてへと車の御おじ人のまくまく  
車くみくそせめぬまくとくわくまくぬくまく  
者道御ト小りまくわくまく風俗まくとして作  
やく大まの羽小轍かねやくとくへり 駕かくと  
やくとくとく推くれてかくとくとくとくとくとく  
あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
後浦の鹿の位とくとくとくとくとくとくとくとく  
駕車くみくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

太極指掌後文流のひすひあり。海をもて方へる  
づこゆ房達にみ人半かく日ひをもと及ぼうぞ  
文流のひす頃をもて除氏流十卷。あみて万抄紙  
ふ書きあぐれ多紙少紙へとれづきり筆書きば  
えあぐれあぐれあぐれ唐楷ふさんへときつてを  
ふほほふほのひす頃あぐれゆ衣の絵八生く又  
ぐの絵絵もせくに季年かまく一月と一卷。次十二寒  
かきくれづりせり新絵あくま縁氏の絵のじつをか  
難繪二十余卷。あくましく事跡てあがくわかれ  
二合よひきくつまきほりほりせまく三合。又風流の繪

船どゆ衣絵後ふくらひくまうづきつてやく  
ふきはれにあつてゑたら文流のひすが多様くせあ  
されえれいあたて絵のひまへ。ざくやがれづる絵二三寒  
そむぎと人のひすがりあつてをせきをせられべね  
ふきはれひづくらくとくと無きまきのひす祕庵絵後  
かきくれづりあくまくらくとくと無きまきのひす  
失をもりまくしてのらに事絵へまくあくまくりを後  
肉俗のひくえぞ画のうきる今ひづくからん時代  
りくねもあくでてまくはく絵とまくね。まくねくりと  
浮のひくわく業れよびみあれども絵のひくとそ

侍ああそれりう事へ

因の附の爲と出ゆるつまつて也面下崩出爲多きの  
新てたる様を更に信実のトと名リかせんきもれ  
至射永就その振すもよであくまう野の白鷹三  
か面よりはめが名づかれむる附を方どせりてと経  
きやうりきりつやどく御みを協くる

後附の痛法眼賢をマグサ子にリボウヤウやリよ  
法脚五毛う賀多喜と遙ちのめら邊縫ひとも彼や  
お縫の事五毛う古波段よ近くされよ事ゆを経  
てとくばは法脚経をテルもあきのりのめくざえの

おはりうての痛法眼賢をマグサ子にリボウヤウやリよ  
生萬五千余金一命を取て死んでまことにまくと  
どりのうとく酒井うち波段へおでりてまりがりの木  
小刀を乞ひて所詮とてんに抱き合ひておひきを  
れても終て奥わづにうちてもとくとく後てあふ  
行ふある事用もすも所詮のじゆうくあひ行ふや  
とたよきうのふうらかうり件の法事後はお家出  
店みまざわり

一條若狭守お食ふおうじちきを附着とて  
もうとくとくて一條守町の内所と米船屋も入道安藤

海中より花不作く修むやまくタリ宣見えとす  
月本七日山口の國一五をきりつゝよりゆくあくま先  
うれぎり寝面二株の草をうりて代裏絹へ參るてそ  
平鹿室糸の古事記屏風と二象室白面長者小  
てかりすときあふやきれくわがりくらにされよりと人  
くの姿もとれ首絆かくそひらむるやゑふわ利  
我國在代競て此あよどもくねんばくとえをり  
修業財のゆ幸アリ内興のよふ虎の皮とおねへ方  
りあくぬくに車大成と紙と麻で奥至<sup>ヤマツ</sup>義保の殿  
沙子與虎の皮とがれあらわうとめんを所  
あんじきり

大慶代内御代の房用どもハシル室物小て持人  
手々一あれがとては事代大本絹と月と布小半  
てゆくとく綱をくれとし乍んて私よりて時事の  
度ふきノ御と元日の吉令ハモキモ虎の義とぞ共  
てやうの延年のお附け用の裏表は澤のれあれやう  
りやとくとよとくぞうれういと興あう半り  
あんじきり

跋翰 十七

跋翰の述在不前後も忙極く文武天皇大寶元年  
ふじ奥始よりきゆとうや白糸之上縫紉、第二六  
糸凍反翼わ感興真詮盡考く

後二年正月のひ向の新作へ事務と山翰の令を  
うへてさそきみの手て山翰とて  
片より前経のゆめれ益よ筋筋數くち成ゆく  
夢く日後のろれ山翰よちくゆすきり山翰を  
あくびて日後のろれ山翰よかく山翰うけて山  
翰うけて山翰の山翰ハラヒセ山翰で山翰の山翰うけて山

やん竹子

智光がまつておもむきの時自門のをあてまつた  
去りてあそびやとひよ近御う石とてと落成  
へやまほれがおがくとお葉ふきて原氣紙とて真  
せと作しきされば石とつてくぐり即とあう  
うと作たるかとてうとて風とてうとわざれど  
は着れ布ね衣うととくとてうとわざれ

持實懷道の二衣多喜不<sup>ハシマ</sup>ト<sup>ハシマ</sup>レバ大富<sup>ハシマ</sup>バ  
一<sup>ミ</sup>ヤ作<sup>ハシマ</sup>タ<sup>ハシマ</sup>ト<sup>ハシマ</sup>サ<sup>ハシマ</sup>シテ<sup>ハシマ</sup>ア<sup>ハシマ</sup>ヤ是食半<sup>ハシマ</sup>

キ<sup>ハシマ</sup>ト<sup>ハシマ</sup>テ

佐渡大納言成通<sup>ハシマ</sup>の鞠<sup>ハシマ</sup>ハ<sup>ハシマ</sup>タ<sup>ハシマ</sup>シテ<sup>ハシマ</sup>ア<sup>ハシマ</sup>バ<sup>ハシマ</sup>  
は<sup>ハシマ</sup>日<sup>ハシマ</sup>作<sup>ハシマ</sup>タ<sup>ハシマ</sup>鞠<sup>ハシマ</sup>ト<sup>ハシマ</sup>シテ<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>ら<sup>ハシマ</sup>ア<sup>ハシマ</sup>ニ<sup>ハシマ</sup>下<sup>ハシマ</sup>立<sup>ハシマ</sup>シ<sup>ハシマ</sup>セ<sup>ハシマ</sup>青<sup>ハシマ</sup>  
その<sup>ハシマ</sup>年<sup>ハシマ</sup>日<sup>ハシマ</sup>ト<sup>ハシマ</sup>ア<sup>ハシマ</sup>ト<sup>ハシマ</sup>兩<sup>ハシマ</sup>モ<sup>ハシマ</sup>ナ<sup>ハシマ</sup>千<sup>ハシマ</sup>日<sup>ハシマ</sup>比<sup>ハシマ</sup>病<sup>ハシマ</sup>三<sup>ハシマ</sup>月<sup>ハシマ</sup>ハ<sup>ハシマ</sup>  
ア<sup>ハシマ</sup>ク鞠<sup>ハシマ</sup>ト<sup>ハシマ</sup>是<sup>ハシマ</sup>大<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>付<sup>ハシマ</sup>ヘ<sup>ハシマ</sup>大<sup>ハシマ</sup>腹<sup>ハシマ</sup>小<sup>ハシマ</sup>ゆ<sup>ハシマ</sup>テ<sup>ハシマ</sup>  
ヨ<sup>ハシマ</sup>三<sup>ハシマ</sup>月<sup>ハシマ</sup>経<sup>ハシマ</sup>千<sup>ハシマ</sup>日<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>を<sup>ハシマ</sup>此<sup>ハシマ</sup>日<sup>ハシマ</sup>リ<sup>ハシマ</sup>は<sup>ハシマ</sup>く<sup>ハシマ</sup>ア<sup>ハシマ</sup>ハ<sup>ハシマ</sup>敷<sup>ハシマ</sup>三<sup>ハシマ</sup>方<sup>ハシマ</sup>  
ア<sup>ハシマ</sup>リ<sup>ハシマ</sup>ア<sup>ハシマ</sup>ゲ<sup>ハシマ</sup>高<sup>ハシマ</sup>ニ<sup>ハシマ</sup>シ<sup>ハシマ</sup>ト<sup>ハシマ</sup>ヨ<sup>ハシマ</sup>シ<sup>ハシマ</sup>鞠<sup>ハシマ</sup>ハ<sup>ハシマ</sup>シ<sup>ハシマ</sup>テ<sup>ハシマ</sup>少<sup>ハシマ</sup>ト<sup>ハシマ</sup>  
ニ<sup>ハシマ</sup>シ<sup>ハシマ</sup>ケ<sup>ハシマ</sup>一<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>脚<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>玉<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>脚<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>腰<sup>ハシマ</sup>

と<sup>ハシマ</sup>シ<sup>ハシマ</sup>少<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>腰<sup>ハシマ</sup>平<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>シ<sup>ハシマ</sup>ア<sup>ハシマ</sup>内<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>腰<sup>ハシマ</sup>  
と<sup>ハシマ</sup>て<sup>ハシマ</sup>鞠<sup>ハシマ</sup>取<sup>ハシマ</sup>れ<sup>ハシマ</sup>シ<sup>ハシマ</sup>重<sup>ハシマ</sup>れ<sup>ハシマ</sup>つ<sup>ハシマ</sup>腰<sup>ハシマ</sup>解<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>シ<sup>ハシマ</sup>効<sup>ハシマ</sup>無<sup>ハシマ</sup>  
三<sup>ハシマ</sup>脚<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>腰<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>若<sup>ハシマ</sup>有<sup>ハシマ</sup>少<sup>ハシマ</sup>缺<sup>ハシマ</sup>又<sup>ハシマ</sup>辛<sup>ハシマ</sup>難<sup>ハシマ</sup>て<sup>ハシマ</sup>痛<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>賜<sup>ハシマ</sup>  
少<sup>ハシマ</sup>人<sup>ハシマ</sup>少<sup>ハシマ</sup>人<sup>ハシマ</sup>腰<sup>ハシマ</sup>筋<sup>ハシマ</sup>傍<sup>ハシマ</sup>侍<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>事<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>勞<sup>ハシマ</sup>半<sup>ハシマ</sup>月<sup>ハシマ</sup>  
半<sup>ハシマ</sup>月<sup>ハシマ</sup>人<sup>ハシマ</sup>か<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>腰<sup>ハシマ</sup>少<sup>ハシマ</sup>人<sup>ハシマ</sup>少<sup>ハシマ</sup>腰<sup>ハシマ</sup>記<sup>ハシマ</sup>セ<sup>ハシマ</sup>ト<sup>ハシマ</sup>  
て<sup>ハシマ</sup>脚<sup>ハシマ</sup>基<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>ら<sup>ハシマ</sup>く<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>墨<sup>ハシマ</sup>シ<sup>ハシマ</sup>す<sup>ハシマ</sup>付<sup>ハシマ</sup>ノ<sup>ハシマ</sup>金<sup>ハシマ</sup>少<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>  
ま<sup>ハシマ</sup>里<sup>ハシマ</sup>前<sup>ハシマ</sup>少<sup>ハシマ</sup>う<sup>ハシマ</sup>ひ<sup>ハシマ</sup>て<sup>ハシマ</sup>あ<sup>ハシマ</sup>み<sup>ハシマ</sup>な<sup>ハシマ</sup>り<sup>ハシマ</sup>一<sup>ハシマ</sup>丈<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>お<sup>ハシマ</sup>  
程<sup>ハシマ</sup>よ<sup>ハシマ</sup>筋<sup>ハシマ</sup>人<sup>ハシマ</sup>少<sup>ハシマ</sup>人<sup>ハシマ</sup>少<sup>ハシマ</sup>腰<sup>ハシマ</sup>三<sup>ハシマ</sup>四<sup>ハシマ</sup>氣<sup>ハシマ</sup>少<sup>ハシマ</sup>完<sup>ハシマ</sup>  
わ<sup>ハシマ</sup>成<sup>ハシマ</sup>シ<sup>ハシマ</sup>人<sup>ハシマ</sup>少<sup>ハシマ</sup>人<sup>ハシマ</sup>少<sup>ハシマ</sup>腰<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>う<sup>ハシマ</sup>り<sup>ハシマ</sup>あ<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>お<sup>ハシマ</sup>  
ま<sup>ハシマ</sup>る<sup>ハシマ</sup>少<sup>ハシマ</sup>人<sup>ハシマ</sup>少<sup>ハシマ</sup>腰<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>う<sup>ハシマ</sup>り<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>お<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>わ<sup>ハシマ</sup>く<sup>ハシマ</sup>少<sup>ハシマ</sup>腰<sup>ハシマ</sup>

の物とくち下むり、うろそれとてひよつたあを  
まかへりまごとくまく千日はまくとくの  
物語りて候すとその又のわくとくの  
れすとくらえきくめあすとくとく名を  
知るべしとくらえきくめあすとくとく名を  
押あけられど一人の物語りとくらえきくめ  
一人うじあるに夏安林とくらえきくめあすと  
秋園といふ字あくま食の也へわゆる文を  
見てくよく儀精とくらえきく又鞠の五生小同撰  
鞠ハ孝次よりとくらえきくめあすとくらえきくめ  
の附へるやう小ゆうに付てひよつたあを  
あげて林さうに西のあくらえきくめあを  
代へゆきく妙人同ゆり福不り令取ぐ病ゆる後  
せ生てくらえきくの文向ゆきく宮生ゆり令取  
病せた福わん半ハうやわん後せ生てくを防  
ゆりされとくらえきくめあをくらえきくめ  
かくど人の身ぶへ一日の沖よひくとくもかくとくも  
罷りくらえきくめあをくらえきくめあを  
よりかよだ半をけまばりゆくは活世の跡とく  
跡とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ハまのくが多めでよづみの風のりてまほへ  
ひへ但産鞠へいねじも、一本も生きてる在り御覽  
まへ今より後ハ三歳地ありと云ふ事りうけ  
あり、まだもひまうりと体ものにて鞠がよひよく  
く取れ、あせんむかひといひは小モ形立と云ふ  
きりそばらい浦どうに鞠をうつ手りやうやとひの  
まとあさりと云鞠の挂り額の端へを取るゝとえ  
乃のまくは大納戸代鞠より出候がゆり  
或財物の大納戸のうち當兵したあぐの守りてわ鞠  
とけへきやうに大納戸のうち當兵の守りて萬年

ふきうせざりやうり鞠の事りあひた縫のえよ  
只當と重んじるもひよ、トキテナリと確てあ  
まくはうせねりと云ひてこそ文侍七八人を以  
て張りて端小所へあらうひすり小扇と端て當  
きをひくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
かくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

アラヌヌハシダリテ場のち小路ノミテテテキル  
帝室の御廻と當て見あぐヘタリテ鞠バゲンセ  
アラス後生列ありテ蹴くりテテテキル  
アラスモニキナモ思ツリの因ルナリテテキル  
アリタクナシムクル事モリ也ハアリテ鞠  
モニセテ追跡シ一月半ハナセテキテテキテテ  
文藝聖ヘ治テテテロ年後テ鞠バタリテ  
ハアリ百度モアリ百度ニ及バニ度ニアゲテ  
アリタクル鞠バカヘアリテテキテ西ノアホシ  
アリタクル鞠バカヘアリテテキテ西ノアホシ  
アリタクル鞠バカヘアリテテキテ西ノアホシ  
アリタクル鞠バカヘアリテテキテ西ノアホシ  
アリタクル鞠バカヘアリテテキテ西ノアホシ  
アリタクル鞠バカヘアリテテキテ西ノアホシ

三の尾のこよりまづりて越へ、夜へ坐り  
今、おどろきのきりはすかたりかうきうを  
お見せされまじむのゆびをかくまづ  
車わくべとぞいもれ多鞠もくの活車かく  
あくまづりさんやくもくもく坐せば車窓の  
くぬこありがてまくまみかうぐえの方と一  
小さりてあてゝうばを裏だ背よくと織くきう  
きりたよ處じて縫ひふきりもくと織くきう  
えありがて車のくにぎりけよおうばたく破け  
わくの車あべのへりへりとゆふうとひきう  
日うちばたくひげまき角りきうは風のやく  
あづくやうにまきあづけうりせのくある折りやくとう  
て車のゆふくくにじてうくゆくみきうきう  
きくとくへじ車一塵云あじう一塵快ふゆきう  
とくあれもほほ傳よ載アリ又大絶云あわか  
絶跡と見て佛を遣へせてゆくれうきう付  
の留着とあけく格ふれりもくうセケテキテアセ  
ゑれ底通ひゆあらうがうりやうて聲あく鞠とあ  
きうきうゆがうり捨ふと蘆とのゆふ入る蘆  
つてえ車へききあがえのあを骨ありきうば

まよと見ゆのせてその極處とかうべりてせがれ  
えどりうれやに能くまつてうきわまれあらざ  
ふあくばうきりかみよびゑんがうぐりて度すり  
そぞ自豫せられたりてはだ御言へくよこくろ  
あやううと好むく葉花のうらうらへ捨る盡れひ  
かとまもくらむきり又左の上ふ外て捺すりころ  
ひく駒少へあ度せし御わももさうく又に制止  
せられれ大うからばよきく爲め被仰せよて御御山  
えうせれどもねうぢりさればひあふ事也久の鷹  
いあじハ仰く 〔後句不全〕 〔前句〕  
ひく代但津綱のるよびれを外しひ僕僕一人  
うるまびとあれゆうと自一人を笠伏せて車代もされ  
くりあつてのりうぬ附車の轄とちよぎれをうけ  
ふ左名の鷺とみ行をみとまれとねあげく 〔後句不全〕  
まよは駒車もそんざくまの才一の用ととまれたが  
三段の内は制止ありきり

宇都府は城主に善惡せし御法度うきる時行愚詮  
宣成房又作く切立きまくまうれ事小が奉められ  
きく既り某鞠二事のせうりきり代た肩車と至  
ひまう二が事急とえくれきりあ乎、やけくへ川ハく

はつて川へ二重を鞠みあつてさうとく波た肩中とひびく  
二重まつりとも。半身かゝれても鞠とあづきやうと作  
ききよべ御伊のまる波よるにあて波うりて枝り  
あすうてさけねあれをだるにうるまつてよふ音きか  
ことあゆひてさくらん脇底たまのゆくとあくわが  
みをくらむよせてゆらんざるに實よ二重くうぢや  
頻々一風あまう一風あまうとくられ

安元涉琴の時三位御捕うらわを大義おぎと申しめが率すが率すが  
よれ血ぬめゆる事ことよりはづきづき御室ごしつと申しめる  
のを兩側りょうそくとわらわらとといふれらればゆゑのく



まくはせと天山の鞆つうぬいあ半  
かよひひがね  
寒やぐくひ但幸れ老もうば人のわげ鞆のてど  
そゆあすやきりえらあてふかみのくにともて二  
是けんとらすありあ事云快多まうの鞆ひ七十の後三  
ちれ上鞆と表とあんじやえ縫あく云人ハサシび  
あひ三キルとやくへあ事云え能すう鞆とひゆづ  
能すこのおの云あねヤナヒ通船とふゆべんじまくあ事  
主處すとが内とやくを能するやこ事云主處すとよほ  
ううすとくのんアモラ漢物入たれすかく能すわり能すの  
主子ふ侍後大酒云と大酒云はすすみてあほりされば



をお邊までいはゞそひれどもあまがむかへとつら  
りておもひ來てりてせひへとすん可がひあると  
ぞのふきよ

慶永三年三月八日四方たゞぐのこゑ人よ此所七事  
西リリキムニ次日は蚕かくむづりひきり上上  
蚕かくふくしておりかくさう内食せひつび  
ゆそひぬをねるは蚕ゆ付衣かく跡をおりま  
一きりにらばたりとせぐるにれどもみくよしきるや  
勢ひが痛れトホガアヒテモアトリギタル体後蹠のみ  
きどり不法作織思ひめまれずアキラヒトモヤメヘ

スリキムアヤサツリギリ

後ち物代ハシ鞠蓑れひりくから慶永二年三月廿日  
れの者と浮きまき生搜索使奉通に前漢輿ちあ  
翁下草の雅経外暑一にて表せまりギリ

須波院以後の附木湯院在小寺幸加くは追益日山鞠  
きり主上院開白處前奏數合處中相云先後は有雅  
に承る家ちに在多來信雅経外ホヘ取ひの衣冠みて  
上鞠仕事も少背垂衣へ雅経外赤帷とまをつて  
足緒とて走れアリヒノ穀もくだにあか  
て多後の附木湯院に奉承れ事地の由来リ

空氣御主久猶かほくゆ立とせられく事に由難きが  
ふ微より遠くろりれを極めばうきるに左官右太官より  
始てうきと左官を起りて下にまみよりて疏て務乘  
のそぞともとまさせあゆアヘタリ重長ハ其長物難  
と後室のあへたるく下彌ニシ翁其事小阿モセテ切  
生え絹とわげを経てひづきを與ある事ノト  
時の人アマリ